

「農と食」 北の大地から

連載第 201 回

アニマルウェルフェアをめぐる市民講座の歩み
～さっぽろ自由学校「遊」の取り組みから～

この連載でも何度か紹介したアニマルウェルフェア（家畜福祉・AW）について、筆者が学習や取材を始めて20年ほどになる。市民の認知度はまだ低い、最近ようやく「そよ風」が吹き始めた。「消費者が変われば社会も変えられる。都市住民を中心にAWについて学ぶ場を創れないか」と考え、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の事業の一環としてアニマルウェルフェアの連続講座を4年前にスタート。講座や見学会などを続け、今春にはAWの入門ガイドとなるブックレットも刊行した。コロナ禍の下でのオンライン開催が長かったこともあって道内外に受講者が広がる中で、今後も地道な取り組みが続く。講座などのコーディネート役を担当してきた経験も踏まえ、その歩みの一端を紹介する。



▲連続講座のテーマは幅広く、この時はペットフードの問題点などを考えた(19年11月、札幌市内で)

◀足寄町「ありがとう牧場」の見学会。コロナ禍で参加者は少なかったが、放牧や乳牛の生態などをじっくり学んだ(20年7月)

家畜福祉の認知度がまだ低い中 届き始めた若い世代からの反響

狂牛病の書出版から20年余り
ようやく吹いてきた「そよ風」

2020年暮れに発覚した、採卵鶏の飼育基準に関わる農林水産大臣絡みの贈賄事件をきっかけに、多くの人が「アニマルウェルフェア」（家畜福祉・AW）という言葉に接する機会が増えてきた。筆者がAWをめぐる取材などを始めて20年ほど、

「ようやく、そよ風」が吹いてきたかな」と感じる。

それでも認知度はまだ低く、「家畜に福祉、何それ？」という受け止め方が大勢である。日常生活の中で畜と接する機会が乏しく、畜産動物といえばバック詰めされた肉や卵、牛乳しかイメージできないのだ。

戦後の早い時期に道北の農村地帯で育った少年時代、身近に乳牛や農

耕馬、羊、鶏などがいた。当時は牛の乳搾りや牛馬の餌やり、糞出し、草刈りなどの仕事をしながら動物たちとの関係を築けたが、今はそんな家庭はごく稀である。

90年代初めにフリー記者になった筆者は、北海道の「農と食」の現場を取材し、適正規模の酪農を追求する人らと出会った。そんな中で、物言わぬ牛たちが大型化と穀物多給によ

る負の影響を受けていると痛感。01年秋、オホーツク地方で生まれた乳牛が狂牛病(BSE)と確認されたのを機に、翌年夏には拙著『狂牛病を追う』を上梓するに至る。

先行する欧州のアニマルウェルフェア事情には疎かったが、出版から間もないころ、東京の動物保護団体「地球生物会議(ALIVE)」代表の故・野上ふさ子さんから電話をも

らったのを契機に、家畜福祉について学ぶようになった。

東京の「農業と動物福祉の研究会」に入会(のちに解散)する一方、14年には道内有志によるAWグループを立ち上げた。セミナーや映画会、農場見学などを企画したが、中身は生産サイドに偏りがち。「消費者が変われば社会を変えられるのではないか」と感じ、「都市住民を主な対象にAWについて学ぶ場を創ってみたい」と考えるようになった。

伴侶動物などにもすそ野広げ
19年から続く「遊」のAW講座

まず、役員を務めていた(一社)アニマルウェルフェア畜産協会の一事業として実施を模索したが、内部の理解を得られず見送り(19年初め)。そこで、農業や原子力関連の講座で交流のあった、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の小泉雅弘事務局長に相談し、AWをテーマにした連続講座を開講する運びとなった。

そのAW講座は19年10月に始まり、ほぼ月1回のペースで現在も続く。半年ずつ開催し、この9月で計8期、延べ44回を数える。こうした定例の市民講座に加え、内外のアニ

マルウェルフェア事情に明るい研究者らを招いての講演会や、道内の農場見学会(計6農場)も企画した。

「遊」では、コーディネートが講座のすべてを仕切るケースが多いが、この講座は筆者ら数人のスタッフが企画・運営する。第1期開始から間もなくコロナ禍に見舞われ、今春までの3年間はオンライン方式で講座を継続。最初の1年余りは畜産動物の福祉(Farm Animal Welfare II FAW)に絞ったが、運営スタッフの希望もあり、その後、実験動物や伴侶動物(ペット)、動物園などの展示動物、野生動物との共存・共生をめざす講座も盛り込み、活動のすそ野を広げている。

オンラインの活用で多彩な講師
講座終了後にフリー懇談の場も

ここで、過去の講座の主なテーマを紹介しておこう。

- ※第1期(19年10月～20年1月)
- ・AWって何だろう?
- ・放牧酪農の有利性
- ※第2期(20年5月～9月)
- ・生産現場で見るAWの実態
- ・「山地酪農」とエンカル消費
- ・動物たちのためにあなたができ



アニマルウェルフェア講座の関連企画で実践農場の見学会も開催し、放牧酪農と山林内での放牧養豚に取り組む上士幌町の「十勝しんむら牧場」を訪問。牧場主の新村浩隆さんから説明を聴く参加者たち(21年7月)



半年ごとの連続講座の内容を案内するチラシ

- 期待できない酪農家の転職を促し、
- ⑤ 家畜虐待など健全な牧夫精神を
 - ④ AWや放牧、有機畜産に関心が
 - ③ 放牧志向の酪農を重点的に支援
 - ② 「アニマルウェルフェア基本法」を制定する一方、「動物愛護管理法」に基づく規制を強化していく
 - ① 穀物の多給によって高泌乳を追求することを止め、少ない乳量で成り立つ酪農へ転換を図る

高ければ対象の「学びの場」を創る

「北海道から持続可能なAW酪農を」では、2050年に向けた戦略目標として次の5項目を提案した。

新潟動物ネットワーク(NDN)の代表を務める岡田朋子さんは、20年ほど前に始めた犬や猫の保護活動を続ける一方、近年は畜産動物のウェルフェアにも取り組む。その歩みや活動内容を紹介してもらった。また、畜産動物以外のウェルフェアについては、運営スタッフの徳光綾子さん(札幌在住)が実験・展示・野生動物の3方面から概説している。

刊行後、うれしい反響もあった。

Info@animalwelfare-school.com
Fd: animalwelfare-school.com/

ができる状態にあること」
したがって、草食獣の牛に大量の濃厚飼料(穀物など)を与えることは、本来の生理や生態を蔑ろにする。鶏は、地面を突ついて餌をついばみ、砂浴びをして体の汚れを取り除き、暗くなると高い木に止まって休む動物だから、ケージに収容したり、狭い鶏舎に閉じ込めて急速に太らせることはアニマルウェルフェアの基本に反する——と強調した。このあたりを理解してもらえば、AWとは正

反対の飼いがされている実態に気づけるのではないだろうか。
ブックレットでは、律令時代から明治初期に至る12世紀の間、肉食を避けてきた日本の食文化と、肉食の風土を下地に動物虐待の反省を踏まえてアニマルウェルフェアに取り組んできた欧州との違いにも触れた。今はAW後進国の日本だが、工場畜産から抜け出し、かつての食生活を取り戻していくことがアニマルウェルフェアの推進にもつながる。
牛や鶏、豚の過酷な飼育実態をはじめ、先月号にも書いた採卵鶏をめぐる「ケージフリー」の動きも紹介。

別分野への就労を支援する
農場レポートに登場するのは、足寄町のありがとう牧場(放牧酪農)、別海町の高橋牧場(同)、厚真町の小林農園(平飼養鶏)、栗山町のThe北海道ファーム(同)、上士幌町の十勝しんむら牧場(放牧酪農&養豚)の5つ。現場の雰囲気や伝わるようにまとめた。

沖縄県の石垣島で肉用牛の繁殖経営に取り組む比屋根恵さんは、鹿児島まで40時間ほどかけて行なわれる、牛たちの海上輸送の過酷な実態をレポート。防疫上の問題と甚大な経済被害の恐れも指摘し、完成したブックレットを畜産関係者らに配りAWの改善を働きかけている。

札幌市内の障害者施設で働く若い女性は、「ブックレットを読んで衝撃を受けた」と、みずから実行委員を務める「フェアトレードフェスタ」で内容を紹介してくれた。関西の大学生から「ゼミの中でAWの進め方などをインタビュしたい」とメールが入り、オンラインで話をしたこともある。こうした熱心な若い世代の存在は心強い。

今秋から連続講座は第9期に入り、「人と動物との共存・共生をめざして」のタイトルで続く。その中から主体的にAWの普及に取り組む人が現れることを期待したい。

■NPO法人さっぽろ自由学校「遊」
アニマルウェルフェア研究会
☎090・9085・9078
メール：
Info@animalwelfare-school.com
Fd: animalwelfare-school.com/



動物福祉の入門ガイドとして作成したブックレット(A5判56ページ・無料配布中)



開講に先立ち、札幌市内で開いた松木洋一さん(日本獣医生命科学大名誉教授・農業経済学)の講演会(19年10月)

- ・国会議員と考えるAW普及の道
- ・行政(道および国)の取り組み
- ※第5期(21年10月~22年3月)
- ・世界と日本のケージフリー活動
- ・学生たちが思うAWとは
- ・動物園動物のAW
- ※第6期(22年4月~9月)
- ・AW養鶏を追求する
- ・「代替肉」「培養肉」とAW
- ・ヒグマからの魂のメッセージを聞く
- ※第7期(22年10月~23年3月)
- ・産業動物獣医師としての仕事
- ・絶滅の危機に瀕するマゲシカ、猛禽類との共生
- ・ヒグマの実像を学ぶ
- ※第8期(23年4月~9月)
- ・屠畜場のAWについて
- ・宮島沼のマガン、道内のタンチョウとの共生
- ・道立「動物愛護センター」設立のための保護活動
- ・有機農業とAW

複数回の講演を依頼することもある。オンライン開催が長かったこともあり、受講者は道内や新潟、東京、沖縄...と広がり、毎回20人前後が参加する。テーマによるが、道内4割道外6割といった感じだ。学生から年配の人まで幅広く、女性が多い。

2時間ほどで講座をいったん終え、その後は講師との懇談の場を設けるようにしてきた。熱が入り、議論が深夜におよぶことも。自由学校ならではのやり方だと自負している。

前述のように、筆者はこの講座を札幌など都市部の人たちが積極的にAWについて学び、みずからの消費行動を変えたり、関係方面に働きかけるきっかけにしてほしい、と願っている。しかし、なかなか難しいことらしく、札幌圏などの受講者がやや少ないのが残念だ。

講座運営チーム(アニマルウェルフェア研究会)は今春、ブックレット「人も動物も満たされて生きる」を刊行した(筆者は編集と一部執筆を担当)。イギリスの家畜福祉団体C I W F (Compassion in World Farming)の助成を受けて作成した、A5判56ページの「入門ガイド」である(2千5百部・無料で配布中)。

運営スタッフと受講者あわせて6人による分担執筆で、次の3章で構成されている。

- ①「家畜福祉」をめぐる歴史といま
- ②北海道のアニマルウェルフェア実践農場を訪ねて
- ③畜産動物以外のウェルフェア

ブックレットの冒頭で、わたしはAWの基本をこう定義した。
「動物の習性や生態、生理を理解し、誕生から最終的な死を迎えるまでの過程において、ストレスから自由で行動要求を満たされた健康的な生活



別海町の高橋牧場を見学し、飼い主と牛たちとの関係などを現場で学習(22年6月)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。